

スキンシップが 解決の糸口

【増加する子供の異常行動や 犯罪を防ぐ為に】

昔は「10年ひと昔」と言いました。今では「1年ひと昔」であります。「1年前はもう古い」という時代になってまいりました。まさに日進月歩、日々成長しているわけでありますが、確かに便利で過しやすい環境が至る所に整えられ何の不自由もなく生活できるようになりましたネ。しかし成長する、即ち何かが変わっていくという事は、良いことばかりではありません。当然、悪いことも表裏一体で存在するのが常ですよネ。終戦後、子供達の心の健康が蝕まれ、その為かつてみられなかったような異常行動や犯罪が増加し、しかも低年齢化の傾向を示しています。まず焦点を当てる

のは「出産時」であります。昔と今とは大きく様変わりしてまいりました。

昔の自宅出産から、今では病院出産（特に母子別室の病院）に、そして母乳哺育が人口哺育（つまり粉ミルク等々）に変わった為に、母子接触の機会が大幅に減った事が大きい要因になっていると言われます。こんな実験があります。

トロント大学小児心理学教授のリー・ソールクはニューヨーク・セントラルパークのある動物園で、猿の母親が生まれたばかりの子猿を抱く時に、殆ど左胸で抱くことに気づきました。人間の場合は右利きの女性253人について出産直後から4日間観察したところ、83%の母親が赤ちゃんとを左胸に抱きました。左利きの母親32人についても、78%は左胸に抱きました。ところが未熟児で保育器に入られたなどの理由で、出産後二四時間以上離ればなれになっていた母親115人の場合には左右差は認められな

った（左抱き53%、右抱き47%）。母子の分離が1〜7日間の場合と、8日以上の間には抱き方の差異は認められませんでした。という事は、母親が赤ちゃんを左胸に抱くかどうかは、出産後24時間のうちにほぼ決定されるという事が分かりました。出産を境として、赤ちゃんは胎内に入った時とは全く違う不協和音の世界に放り出されます。その際、外界に馴染むまでの出産直後の24時間以内に、母親の心音が聞けるかどうか（左抱きか、右抱きか）で、その子の心理面に大きな差が生ずる事が確認されました。

『おんぶ・抱っこ・添い寝の効用』13世紀イタリアのシシリイ島を統治していたフレデリック2世は、人の本来の言葉は何語であるかを調べようとして1つの実験を試みしました。王は一群の新生児の育て親を集めて言いました。「責任をもって養育せよ。ただし1言も赤ん坊に話しかけてはなら

ぬ」と。そうすれば子供は話された言葉を1語も聞くことなく、自分本来の言葉を話し始めるだろうと考えていたのです。

ところが、この王の試みは水泡に帰しました。なぜならこの子供達は全員死亡してしまっただけなのであります。育ててくれる大人に笑顔を見せてもらい、愛情をこめて話しかけてもらわなければ、その赤ちゃんは生きていくことが出来ないという現実があるのです。

終戦直後に日本を訪れたスウェーデンの小児科医であるリンド先生は、「日本に異常行動や犯罪が少ないのは、おんぶ・抱っこの習慣が定着しているからだ」と感心し、帰国してから「KODOMO」という商標名でおびいひもを販売したという事実がある程です。その優れた生活習慣が、たった60年足らずで大きく崩れてしまいました。これも合理化を目指し、物事が便利でスムーズになった為に、最

も大切な「心の成長」を疎かにしてしまっただけでなく、なかなうかと考えています。便利なのはよいのですが、大事なもので忘れてしまっただけで、何のための便利なのか分らなくなってしまうのです。

この様に「おんぶや抱っこ、母乳を与える」そして母と子が密着させる行為（スキンシップ）が、お互いに親近感を増し、安心し、お互いの幸せが出来るものではないでしょうか？

幸せとは本来「仕合せ」と書きます。二人の人間が双方お互いの「働きかけ」によって「仕合せ」である状態つまり「お互いに仕合せい仕合せ合つて、仕合せである」と言うのです。その仕合せを多く感じることが、子供達の心の健康を守り、将来的に異常行動や犯罪を防ぐ早道になるものと確信しています。

合掌 副住職 谷川寛敬